トルコ語における名詞のアクセントの実現について

佐藤久美子

(The Two Types of Nominal Root in Turkish and the Pitch Realization of their Accents)

Kumiko SATO

(pp. 23-39)

Contribution to the Studies for Eurasian Languages series vol.15

『チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究』
Native and Loan in Turkic Languages

九州大学人文科学研究院言語学研究室 Department of Linguistics, Graduate School of Kyushu University／ユーラシア言語研究コンソーシアム The Consortium for Studies of Eurasian Languages
2009 March
ISBN 978-4-903875-18-7

トルコ語における名詞のアクセントの実現について[1]

佐藤　久美子
（九州大学）
xiao3de@hotmail.com

1. はじめに

トルコ語の「ストレス」は、以前より多くの研究者によって論じられている。名詞語幹は、最終音節にストレスがある regular root と、それ以外の音節にストレスがある irregular root の 2 つのタイプに分かれることが知られている (Lees 1961, Lewis 1976, Sezer 1986) 。本論文では、この 2 つのタイプの名詞において、どのようなピッチが実現するのかを観察する。特に、単語単位ではなく、文におけるピッチの様相に注目する。これらの観察に基づき、(i) irregular root には 2 つのピッチパターンがあること (ii) 文中に疑問詞などのフォーカスが含まれる場合、フォーカス以外の語では、regular/irregular root に関わらず、同様のピッチパターンを示すことを明らかにした。

2. トルコ語の基本的なピッチパターン

2.1. 名詞の韻律的特徴

トルコ語の名詞の韻律的特徴について、以前より、ストレスの位置が議論の焦点となっている。固有語のほとんどが最終音節にストレスがあり (regular root) 、地名、外来語、副詞、接続詞の多くに例外 (irregular root) があると記述されている。

regular/irregular root の違いは、regular root は、接辞が後続するとストレスが接辞に移動するが、irregular root では、接辞の有無に関わらず、特定の音節にストレスがあるという点である。以下、2 つの root における違いを示す。

---

[1] コンサルタントは、Fatih Özer、21 歳、1987 年に東部アナドル地方の Malatya で生まれ、生後 20 日から現在までイスタンブールに在住。

(1) regular root

a. okúl ＜学校＞

b. okul-úm ＜私の学校＞

c. okul-um-dán ＜私の学校から＞

(2) irregular root

a. bánka ＜銀行＞

b. bánka-m ＜私の銀行＞

c. bánka-m-dan ＜私の銀行から＞

ごくわずかであるが、次のようなミニマルペアが存在する。

(3) a. mısír ＜とうもろこし＞

b. mísır ＜エジプト＞

しかし、一方で、「ストレス」が音声的にどのように実現するのかという問題については、十分に議論されていない。これに対し、Levi (2005) は、音響音声学的な実験により、「ストレス」は、顕著な「ピッチの下降」を伴って実現されることを明らかにした。そして、この結果に基づき、トルコ語はアクセント言語であると結論付けた。本論は、Levi (2005)に基づき、以下、「ストレス」ではなく、「アクセント」という用語を用いて記述を行なう。

2.2. 名詞のアクセント

regular root と irregular root では、それぞれ次のようなピッチパターンが観察される。regular root ではピッチの下降が起こらず、最終音節でピッチの上昇がする。irregular root では、ピッチの下降が起こり、その位置は語彙的に決まっている。1 音節から 3 音節までのピッチパターンを示す。

(4) 表面的なピッチパターン

1 音節語		2 音節語		3 音節語	
mum	＜ろうそく＞	okul	＜学校＞	telefon	＜電話＞
		banka	＜銀行＞	lokanta	＜食堂＞
				pencere	＜窓＞

irregular root である名詞語幹には、アクセントが語彙的に指定されており、一方、regular root である名詞語幹には、アクセントが指定されていないと仮定する。以下、便宜上、記述的な用語として regular / irregular root を使用する。

(4)のそれぞれの語は、基底で(5)のようにアクセントが指定されていると仮定する。

(5) 基底のアクセント

1 音節語	2 音節語	3 音節語
mum ＜ろうそく＞	okul ＜学校＞	telefon ＜電話＞
	ban¬ka＜銀行＞	lokan¬ta ＜食堂＞
		pen¬cere ＜窓＞

Nespor and Vogel (1986), Kabak and Vogel (2001)に従い regular root の最終音節に生じるピッチの上昇は、Phonological Phrase (語幹＋接尾辞[2]) の最終音節に、規則によって指定されると仮定する。

(6) regular root

a. /okul/ [okul]PW

b. /okul-um/ [okulum]PW

c. /okul-um-dan/ [okulumdan]PW

(7) irregular root

a. /ban¬ka/ [banka]PW

b. /ban¬ka-m/ [bankam]PW

c. /ban¬ka-m-dan/ [bankamdan]PW

2.3 Irregular root における 2 つのピッチパターン

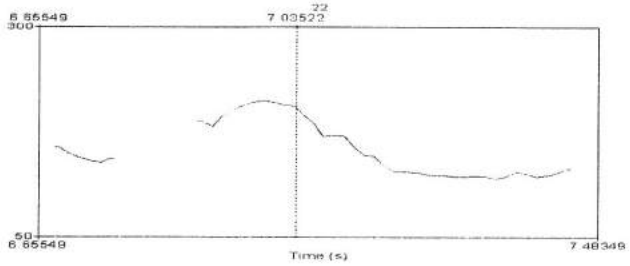
本節では、文中での regular root と irregular root のピッチの実現を比較する。そして、irregular root では、2 つのピッチパターンがあることを指摘する。

---

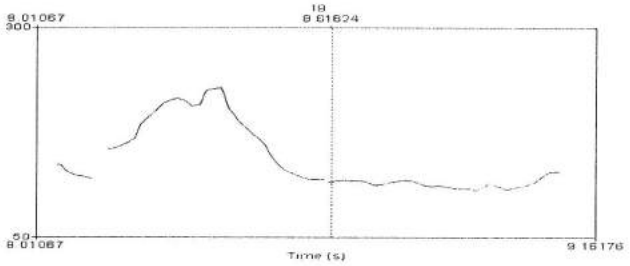
[2] いくつかの接尾辞は、Phonological Word に含まれないものとして語彙的に指定されている。Kabak and Vogel (2001)は、それらを Phonological Word Adjoiners と呼んでいる。

以下では、regular root＋接尾辞 /okul-a/ (学校に)" と、irregular root＋接尾辞 /ban¬ka-ya/ (銀行に) を比較する。(8) - (10)の発話は、"Nereye gidiyorsun? (どこに行くの？)" の返答としての発話である。なお、破線は単語の境界を表す。

(8) okula gidiyorum. ＜学校に行くの＞



(9) bankaya gidiyorum. ＜銀行に行くの＞



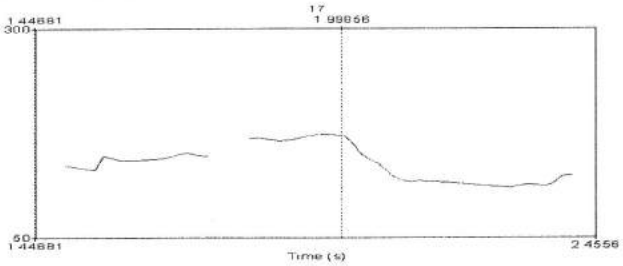
(8)と(9)で示したとおり、regular root と irregular root では、明らかにピッチの様相が異なる。*okula* では、ピッチの下降が起こらず、最終音節でピッチが上昇する[3]。*bankaya* では、ピッチの下降が起こっている。

ここで注目したいのは、irregular root である/ban¬ka/にはもう 1 つのパターンが観察される点である。

---

[3] regular root では、ピッチの上昇の後、ゆるやかなピッチの下降が生じる。これは、名詞の持つ特徴ではなく、Prosodic Word、もしくはより大きな韻律範疇が持つ特徴であると考える。ここでは、このことに関して詳細な議論はしない。

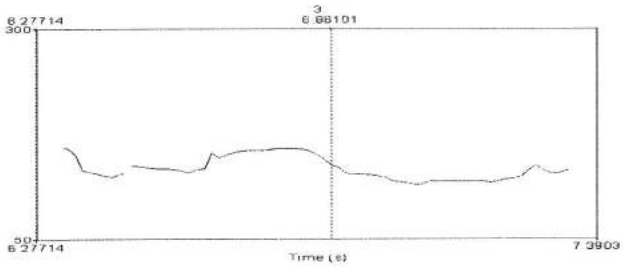
(10) bankaya gidiyorum. ＜銀行に行くの＞



/ban¬ka/ では、基底のアクセントが音声的にピッチの下降として実現される場合 (9)と、そうでない場合 (10)がある。後者では、regular root と同様に、最終音節にピッチの上昇が生じている。一方、regular root である /okul/ では、最終音節以外でピッチの上昇が生じる(8)以外のパターンは見られない。

次の例も、同様の現象を示している。regular root＋接尾辞 /baba-m/ (私の父)と、irregular root＋接尾辞 /a¬nne-m/ (私の母)を比較する。以下の例は、"Kim geliyor (誰が来るの？)" の返答としての発話である。

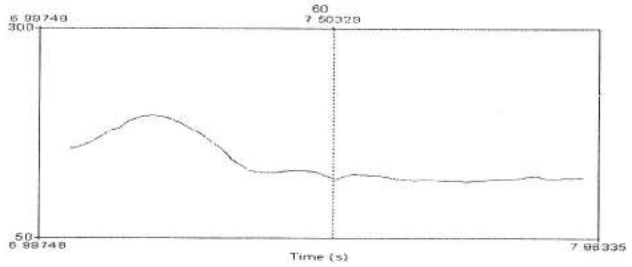
(11) babam geliyor. ＜父が来るよ＞



(11)では、*babam* の最終音節で、ピッチの上昇が見られる。これは、同じく regular root＋接尾辞 *okula* で観察されるピッチパターン (8)と同じである。

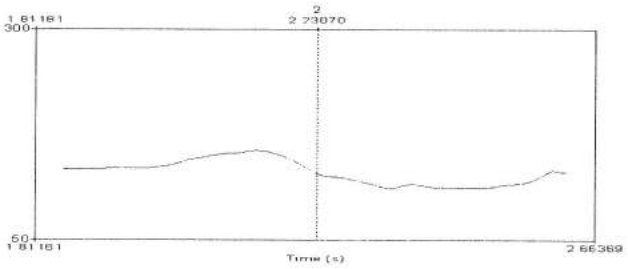
次に、*annem* が、同じく irregular root＋接尾辞 *bankaya* と同様に、2 つのピッチパターンを持つことを示す。

(12) annem geliyor. ＜母が来るよ＞



(12)では、*annem* の初頭音節にピッチの下降が観察される。irregular root である/a¬nne/では、もう 1 つのピッチパターンが観察される。(13)では、regular root の/baba/と同様に、最終音節でピッチの上昇が観察される。

(13) annem geliyor. ＜母が来るよ＞



(9)と(10)、(12)と(13)の例によって、irregular root の基底のアクセントが音声的に実現する場合としない場合があることを示した。アクセントが実現しない場合は、regular root と同様に、Phonological Word の最終音節にピッチの上昇が起こる。

3. ピッチの実現とフォーカスの関わり

本節では、フォーカスの有無が regular / irregular root のピッチの実現にどのように関わっているのかを明らかにする。観察対象とするのは、これまで見てきた regular root である/okul/, /baba/と、irregular root である/ban¬ka/, /a¬nne/である。以下、これらの語がフォーカスである場合、フォーカスでない場合のピッチを観察する。そして、これらがフォーカスでない場合、両者で同様のピッチパターンが生じることを示す。

3.1. フォーカス

ここでは、次の 3 つの要素が文中のフォーカスであると仮定する。

(14) a. 疑問詞
b. 疑問詞疑問文に対する回答文で、疑問詞に対応する語
c. yes/no 疑問文において、疑問の接辞 *-mI* に先行する語

(14)に従い、以下の文では下線部がフォーカスであると考える。

(15) a. Nereye geliyorsun? ＜どこに行くの？＞
b. Bankaya geliyorum. ＜((15a)の回答として) 銀行に行くの＞
c. Bankaya mı gitten? ＜銀行に行ったの？＞

3.2. フォーカスである場合

【/okul/と/ban¬ka/の比較】

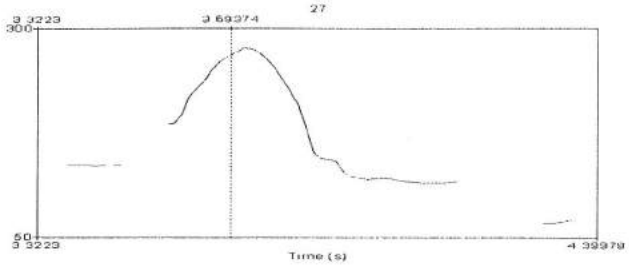
(16) "Nereye gidiyorsun? (どこに行くの？)" に対する回答としての発話。
a. Okula gidiyorum. ＜学校に行くの＞ [(8)]
b. Bankaya gidiyorum. ＜銀行に行くの＞ [(9), (10)]

(16)の例は、すでに 2.3 節で扱っている。[ ]の番号は、それぞれのピッチ曲線と対応している。

次に、それぞれの語が、疑問の接辞 *–mI* に先行する場合を見る。

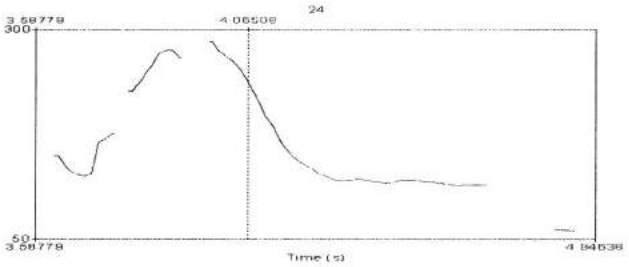
(17) "Okula/Bankaya gidiyorum (銀行／学校に行く)"という友人に対して、それを確認する発話である。
a. Okula mı gidiyorsun? ＜学校にいくの？＞ [(18)]
b. Bankaya mı gidiyorsun? ＜銀行に行くの？＞ [(19), (20)]

(18) Okula mı gidiyorsun?



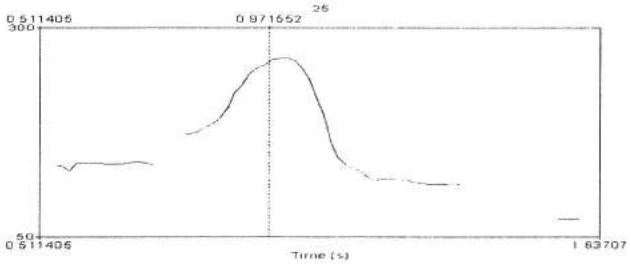
-mI の直前にあることによって、ピッチが大幅に上昇している。全体が高くなるのではなく、最終音節の上昇がより著しくなる。以下の例も同じく、語全体ではなく、ターゲットとなる音節で極めて高いピッチが生じる。

(19) bankaya mı gidiyorsun?



irregular root の場合、2.3 節で観察したように、ここでももう 1 つのピッチパターンが観察される。

(20) bankaya mı gidiyorsun?



【/baba/と/a¬nne/の比較】
(21)は、2.3 節で見た通りである。

(21)　遠くから女性が歩いてくるのが見える。友人が「誰がやってくるの？」と尋ねる。それに対する発話。

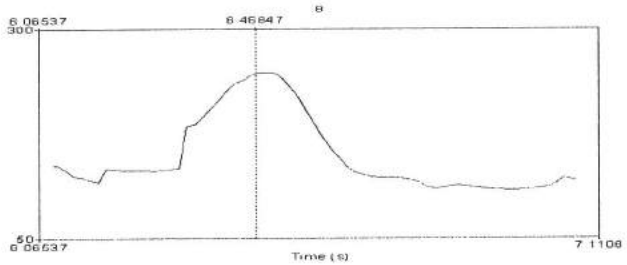
a. Babam geliyor.　＜お父さんが来るよ＞ [(11)]
b. Annem geliyor.　＜お母さんが来るよ＞ [(12),(13)]

次は、*-mI* に先行する場合である。

(22)　「お父さん／お母さんが来るよ」という友人に対して、それを確認する発話。

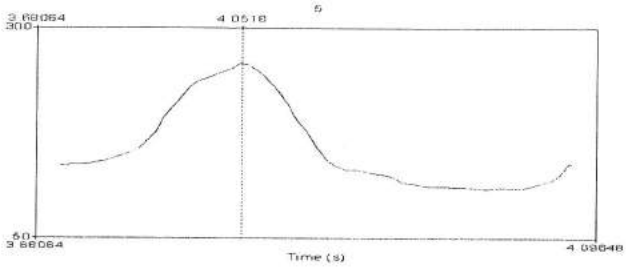
a. Babam mı geliyor?　＜お父さんが来るの？＞ [(23)]
b. Annem mi geliyor?[4]　＜お母さんが来るの？＞ [(24)]

(23) babam mı geliyor?



[4] コンサルタントより、*annem* が*-mI* に先行する場合、基底のアクセントが実現する(12)のような発話は不自然であるという指摘を受けた。この理由についてはまだ明らかになっていない。今後の課題とする。

(24) annem mi geliyor?



3.3. フォーカスでない場合

3.3 節では、regular/irregular root、それぞれの名詞が、フォーカスに先行する場合と後続する場合に、ピッチがどのように実現するのかを観察し、アクセントの対立がなくなることを示す。

3.3.1. フォーカスに先行する場合

動詞の直後に疑問の接辞 *-mI* がくる yes/no 疑問文を観察する。前節で見た例と同じく、*-mI* の直前の語、すなわちフォーカスで非常に高いピッチが生じる。そして、フォーカスである *gittin* (行った)に先行する *okula/bankaya* では、共に低く平らなピッチが実現する。

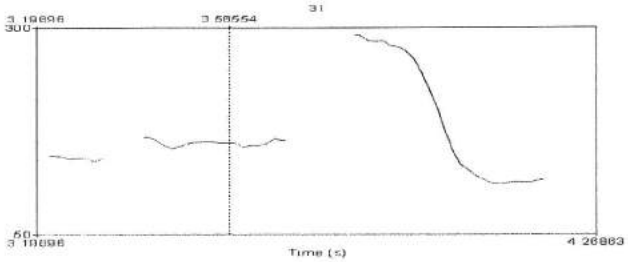
【/okul/と/ban¬ka/の比較】

(25) 学校／銀行に行く予定だと言っていた友人に対して、それを実行したかどうかを尋ねる発話である。

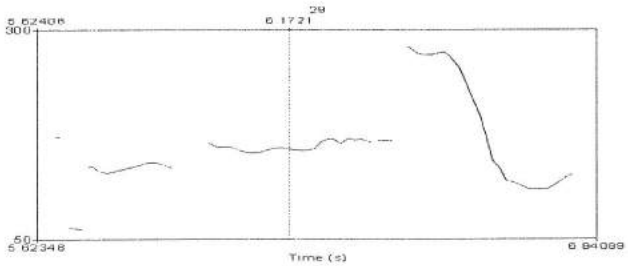
a. Okula <u>gittin</u> mi? ＜学校には行ったの？＞ [(26)]

b. Bankaya <u>gittin</u> mi? ＜銀行には行ったの？＞ [(27)]

(26) okula gittin mi?



(27) banakaya gittin mi?



【/baba/と/a¬nne/の比較】

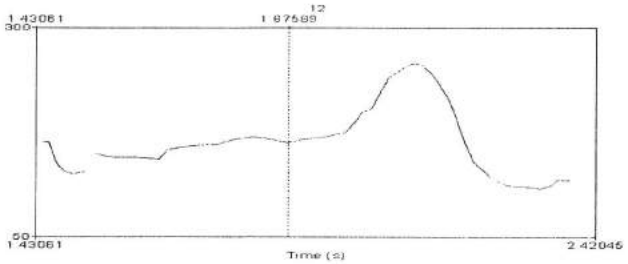
ここでも同様の現象が観察される。フォーカスである *geliyor* (来る)に先行する *babam/annem* では、低く平らなピッチが実現する。

(28) お父さん／お母さんが来る予定だったが、実際に来るかどうかを実行したかどうかを尋ねる発話。

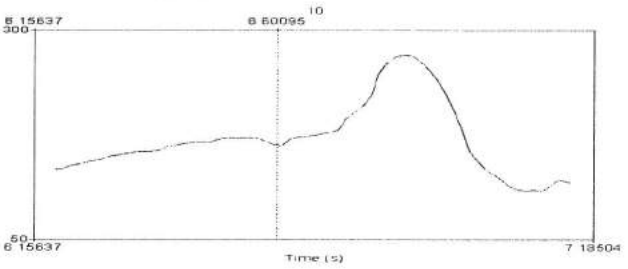
a. Babam <u>geliyor</u> mu? ＜お父さんは来るの？＞

b. Annem <u>geliyor</u> mu? ＜お母さんは来るの？＞

(29) Babam geliyor mu?



(30) Annem geliyor mu?



3.3.2. フォーカスに後続する場合

疑問詞 *Kim* (誰が)を含む疑問詞疑問文を観察する。疑問詞の後ろでは、regular/irregular root に関わらず、ピッチはなだらかに下降する[5]。

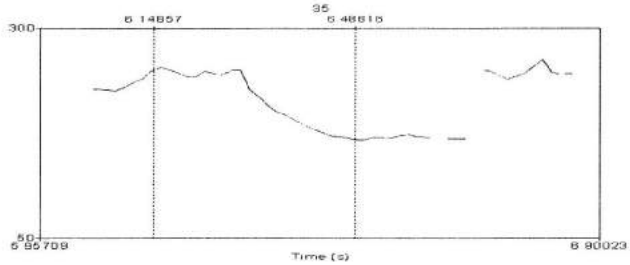
【/okul/と/ban¬ka/の比較】

(31) a. <u>Kim</u> okula gitti? ＜誰が学校に行ったの？＞
b. <u>Kim</u> bankaya gitti? ＜誰が銀行に行ったの？＞

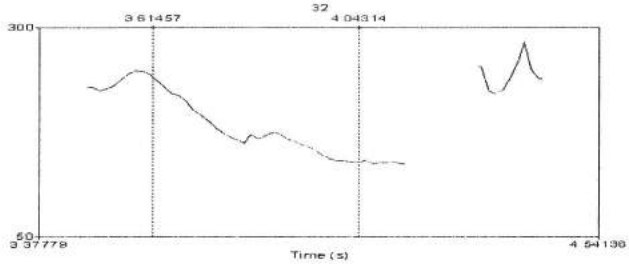
---

[5] 疑問詞疑問文の文末では、ピッチの上昇が見られる。これは、動詞が持つ特徴ではなく、Prosodic Word よりも大きな韻律範疇が持つ特徴であると考える。

(32) Kim okula gitti?



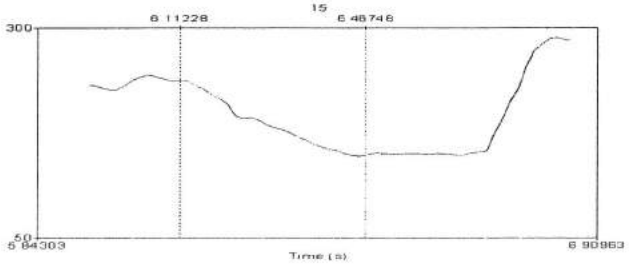
(33) Kim bankaya gitti?



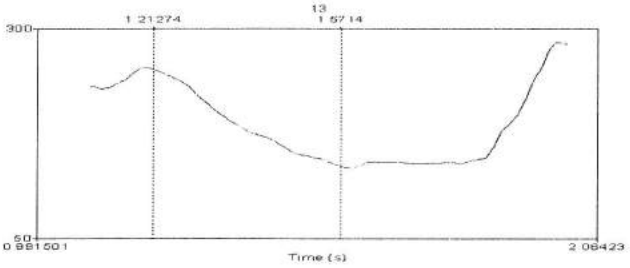
【/baba/と/a¬nne/の比較】

(34) a. <u>Kim</u> babamı gördü? ＜誰がお父さんを見たの？＞
b. <u>Kim</u> annemi gördü? ＜誰がお母さんを見たの？＞

(35) Kim babamı gördü?



(36) Kim annemi gördü?



3.4. 複文におけるピッチの様相

最後に、3.3 節で見たピッチパターンが、複文にもあてはまることを示す。(37a,b)は、疑問詞 *Kim* (誰が)が主節にある場合である。2 つは、疑問詞の位置が異なるペアである。(37c)は、疑問詞 *Kimin*[6] (誰が)が従属節にある場合である。それぞれの文で、どのようなピッチが実現するのかを観察する。

(37) a. Kim [ablamım geldiğini] babama söyledi?
誰が [姉が 来たことを] 父に 話した
＜誰が姉が来たことを父に話したの？＞

b. [Ablamım geldiğini] kim babama söyledi?
＜姉が来たことを誰が父に話したの？＞

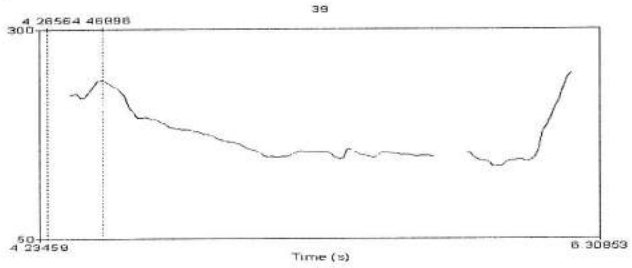
c. Annem [kimin geldiğini] babama söyledi?
母が [誰が 来たことを] 父に 話した
＜母が誰が来たことを父に話したの？＞

(38)は、フォーカスである疑問詞 Kim (誰が)が文頭にある場合である。3.3.2 節で見たとおり、フォーカスの後は、文末までゆるやかな下降を続ける。以下では、縦の破線の間が疑問詞の部分である。

---

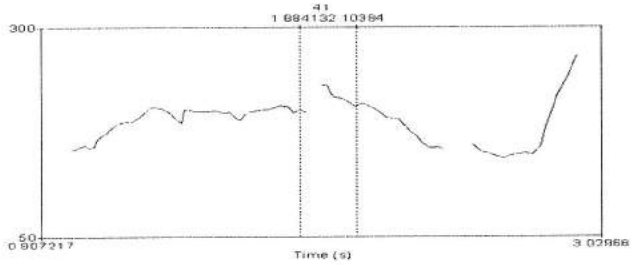
[6] 従属節内の主語は、属格で表されるため、(37a,b)と(37c)で疑問詞の形が異なっている。

(38) <u>Kim</u> [ablamım geldiğini] babama söyledi?



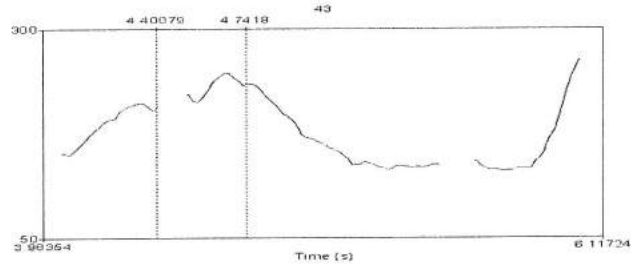
次は、フォーカスである *Kim* が文中にある場合である。フォーカスの前では、ピッチがゆるやかに上昇する、もしくはほぼ平らになり、フォーカスの後ろでは、ここでもゆるやかな下降が見られる。

(39) [Ablamım geldiğini] <u>kim</u> babama söyledi?



フォーカス *Kim* が従属節にある場合でも、ピッチパターンは、(39)と同じである。フォーカスまでピッチが上昇し、フォーカスの後はなだらかに下降する。

(40) Annem [<u>kimin</u> geldiğini] babama söyledi?



4. まとめ

本論文では、トルコ語における regular/irregular root、それぞれのピッチの実現を観察した。語彙的アクセントが、音声的にピッチの下降として実現しないことがあることが分かった。語彙的アクセントは、その語が文中のフォーカスであるときにのみ音声的に実現されうることを明らかにした。さらに、文中のフォーカス以外の語では、アクセントの対立がなくなり、regular/irregular root が同じピッチパターンを示すことを指摘した。

謝辞

言語コンサルタントを快く引き受けてくださった Fatih Özer 氏に、心より感謝申し上げます。本論文で示した発話データは、氏の協力がなければ得られないものでした。また、本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた指導教員の久保智之教授に感謝致します。多くの知識や示唆を頂きました。もちろん、本稿の不備や誤りはすべて筆者の責任です。

最後に、本研究は、科学研究費 (18251007) 基盤研究 (A) 「チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究」の助成を受けたものです。ここに謝意を記します。

参考文献

Kabak, Barış and Irene Vogel (2001) The phonological word and stress assignment in Turkish. *Phonology* 18, 315-360.

Lees, Robert B. (1961) *The phonology of modern standard Turkish*. Bloomington: Indiana University Press.

Levi, Susannah V. (2005) Acoustic correlate of lexical accent in Turkish. *Journal of the International Phonetic Association* 35, 1, 73-97.

Lewis, Geoffrey. (1967) *Turkish Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Nespor, Marina and Irene Vogel (1986) *Prosodic phonology*. Dordrecht: Foris Publications.

Sezer Engin (1983) On non-final stress in Turkish. *Journal of Turkish studies* 5, 61-69.

The two types of nominal root in Turkish and the pitch realization of their accents

Kumiko SATO
(Kyushu University)
xiao3de@hotmail.com

This study investigates the pitch realization of noun accents within a sentence in Turkish. Turkish noun roots are divided into two groups, regular root and irregular root, according to the suprasegmental property (Lees 1961, Lewis 1976, Sezer 1986). Regular roots have stress on the final syllable, and stress moves rightward in suffixation. Irregular roots are not stressed on the final syllable.

Many researchers have discussed the issue of "stress", but a lot remains to be understood regarding phonetic realization. Levi (2005), through an acoustic-experiment, concludes that Turkish is a pitch-accent language. Following Levi (2005), we consider Turkish nouns to have the accentual contrast.

In this paper, we looked at the pitch pattern of regular/irregular root nouns. They are divided between cases where the root noun is focused, and those where it is not focused in the sentence. Based on these observations, I point out the following.

(i) Irregular roots have two pitch patterns when they are focused in a sentence.

(ii) Regular/irregular roots show the same pitch pattern when they are not focused in a sentence.